



WL45
7
2-3

小舟のりりりの園平島市の都立  
 二の津の里は一帯おぼろげに半掃の  
 也右の海はあまのりりり尾張の  
 君は世つらくにまひり中らりゆ  
 つらまひり  
 君の侍ゆるもあはれあはれあり  
 りりりり月夜はあまのりりり  
 たのりりり結一はあまのりりり





Handwritten text in Kuzushiji style, consisting of approximately 12 lines of vertical script.

鶴續序

Handwritten text in Kuzushiji style, consisting of approximately 12 lines of vertical script.

おもしろくもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた

鶴續序二

おもしろくもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた

おもしろくもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた  
もよみかたもよみかた

二 兼平の文章の妙を尋ねて見よ  
 兼平の文章の妙を尋ねて見よ  
 兼平の文章の妙を尋ねて見よ

兼平の文章の妙を尋ねて見よ



兼平の文章の妙を尋ねて見よ

兼平の文章の妙を尋ねて見よ

文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ  
 文章の妙を尋ねて見よ

兼平の文章の妙を尋ねて見よ



よりとまらぬ物とよにふられハ酔多し初夢も其  
名のとて一あれハたし一武士の志かたをもつて  
あつてあつて一清と予よりいふ其物其名の由と  
らうてあつての名もよきサリ我才の薄層たる何と  
其行もよきよ一三品予ハ酒賜のそ一てハ竹の  
仲満も一入も是ハ對とて地のいひいふ  
是の田子の

僧或人書

吾子ハ講武と以て軒号一白も飾借も一月以て  
名とすわら面白く一や吾子ハりり武門の人ヤ  
分賣その暖簾ハ分屋とて一油賣の看板ハ

鶴續上ノ三

油屋と名のハ買と人のすうふま一さくめたりハ其  
いれわり吾子ハ風雅の良負たより武をこ一  
混せん一私ハ迷いと一之ハ一擧と様とて詩と  
獄も一扇とあて秋も一も一それとそれハ是  
うてあつても是を以てそれとあつてそれと  
是と害せと文武二とと稱も一其事誦とて行  
人は是を嘆ふとて一かたと名のハ一甚奥一五を  
井ハ射法の辨す一或人は是を評して曰く文の始ハ  
武士の武士奥ハ白雲と掩ふと書て人の侍りハ汁  
を一武藝とてすく一といひて代の潮ハ  
蓋とて一其書ハ書一ハ一命奥キハ一其書ハの  
てハ藝の自慢ハ侍者ハ無人ヤ律とあり

破戒並斬と経學よりいりて人の不行處よりき  
わ〜とちりつてわ〜とをせむ世といふ二宝の拾ゆ  
〜と異人も療治もふ〜とをふ〜白蔵といふ口  
を閉扁龍といふと袖うて只つ〜せて〜よりか  
か〜新當流も正法念流の〜より武士の常〜と  
それ〜と〜と〜と誰う武門は生れて是と  
〜と〜と〜と二流三流の印可免許もい〜と  
存〜と〜と天下の名人はゆの〜と〜と世に  
まて各列の〜と世は馬と〜と〜と人われ〜と山  
入〜と名と〜と〜と入道〜と〜と〜と  
か〜と〜と〜と昔武人歌を自撰〜とこの歌の  
ゆの要はよ〜と〜と定家家陸も耕也〜と達〜と法

鳥鱗上之三

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
師匠を下〜と〜と〜と師匠と〜と〜と〜と  
我の〜と本〜と〜と遼東の交や〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
や〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
方の油ひく〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
荒言も〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
か〜と得違ひや二騎より〜と渡〜と〜と川  
何〜と不足の先陣〜と大死を〜と〜と後陣の〜と  
川〜と〜と〜と〜と先登の功は立〜と〜と折武藝十万人  
は勝れ〜と〜と用〜と不義〜と〜と明君を謀せ〜



士氏の行跡もあつくくもたより名もて余力  
 而ハ仁義五常の道とありし人ハ其家裁  
 も乖謬もぬれ一物も言えんやまや五常の  
 規矩もつれて何とて其功となり何とて其  
 名とてむ家と建て後子地築せといふて  
 功なり名通るハ我ハ行ひの仕と云んる子を  
 才退々としんて己も善合ひとて又ハ仁義の  
 字同ハ徳后とていろは習ふは子ありて仁義  
 五常とて初も重言もててハ我ハ鼓三徳  
 のせも五常もたふもてねと先ハ五常の  
 仁義ありて仁義五常といふ及る人けり  
 のん庚申とていりてぬれとや我ハ

勅録上ノ四

ぞも能階ハ馬もね壽の鼻をせりいも隱も金色  
 の光もて孔子の肌骨と道も蚕も道徳徳り  
 物もつれと勸学院の權も家求を擧れ  
 声もて聲もつれぬややりて鄙生立をたぬ  
 直身も必上も極ぬもても潜替付  
 五指の付とてれハ祖宗の血脈もてて能階文  
 章の名人ハ一人やハ又弱の方  
 一人は渡りてりとの責上げ世文の  
 固ハてりて板すれ能階ハ定めて上も  
 てやありて武士も共具くして語くハやんと  
 蘇平の代もてりて楠村上り上り立ハ大言



麦飯も刈三石の内と云ふべし

僧人能帝定

一飯はなり茶専用と云ふべし汁をさし勿湯うてなから  
茶をさしと云ふべし

一茶茶ハ一ツとして奥身ハ有るは伊と殊奇と必おひ下は  
たつこ時ハ豆腐か子ハ糖と云ふべし言はれり

いふものありと云ふべし

一考の物ハ清すべし及云ふべし

一りハ麵麩の好ありと云ふべし定知ハ右と准べし

一酒ハ盃ハ大小われハ上戸と云ふべし二献ハ酒と云ふべし

鶉續上ノ六

宴會なりぬはちりてすむと云ふべし  
たれも膳ハ一茶茶の之と云ふべし若ハも来殺生のむかふ  
者と名つけて一掃と云ふべし亭のたつと云ふべし  
雪雲の夜風は帰路の寒と云ふべし防むべし膳後の池子を  
残しと云ふべし満尾の上と云ふべし一盃をぬくすも又  
其時の掃掃はよくと云ふべし一掃二盃の扱と  
堅く甘と云ふべし相撲せと店の果ハ必慎と云ふべし  
御階の集會の飲合はと云ふべし世のものと云ふべし  
其その物なりと云ふべし公卿のなり茶茶三石ハ皆人の  
口と云ふべし其志めと云ふべし女ハ茶と云ふべし  
汁ハと云ふべし教たれハと云ふべし茶教と云ふべし  
さしと云ふべし翰の上と云ふべし茶の膳と云ふべし

くくハ行聊の停の頭陸とすくサ行馬サ行打とこれ  
くくくく本筋の本情はわくくくくくくくくくくく海  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
信わく志と賞して饑具の定とくくくくくくくくくくくく

狂歌文

動節壽夫の端ゆかりて狂の壽ハ世と斗わくくくく  
石の性ハ硬くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
苦くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
其齡ハ月とわくくくくくくくくくくくくくくくく  
られてハゆくくくくくくくくくくくくくくくくく

續二ノ七

致くわてハ是も齡ハくく年と斗ハくくくくくくく  
くくくくの姥嫁ハはくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
けくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
致仕大夫鏡徴君の近侍くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

仍其求作序



多くておぼろしく敷くは是く解池の雨森なるの  
と老のりんと春ののりんと可なりと若くも交り  
る徳のせいなるも交りては徳も交りては徳も交り  
出居かき一徳一交の門敷きも日あかり一徳の徳と  
いはしむる勝寺の親までは何れも人なり衣既と老よ  
ち入りしをなかりし人なりとて東籬のものを解す  
一とついでに徳一徳とてし中へ勝寺とてし可なりとて  
それいふかき一徳一交の門敷きも日あかり一徳の徳と

栄とてついでに徳一徳とてし中へ勝寺とてし可なりとて

一徳辨

鶴城上ノ九

鞠とすぬん九抜ありとすうわぬん九徳ありとすぬ  
あつち花巻九抜はしれぬん九徳ありとすぬ  
さびいんら不用のゆもいひてぬん九徳ありとすぬ  
かいついぬん九徳ありとすぬ外天よりぬん九徳ありとすぬ  
若くはつた世を何れもいふぬん九徳ありとすぬ  
おりにぬん九徳ありとすぬの圓とぬん九徳ありとすぬ  
へらも常えぬん九徳ありとすぬの者いぬん九徳ありとすぬ  
降平納吉のぬん九徳ありとすぬの近何曾うかぬん九徳ありとすぬ  
けへのぬん九徳ありとすぬの便ぬん九徳ありとすぬの言ぬん九徳ありとすぬ  
にさ藤縁のぬん九徳ありとすぬの将縁とぬん九徳ありとすぬ  
はさ藤縁のぬん九徳ありとすぬの言ぬん九徳ありとすぬの道な好  
の茶人としてぬん九徳ありとすぬの瓶とぬん九徳ありとすぬの茶人の

遊ひあつて脈合をしく各別のおりこぎせし又大小の二つ  
中は大人にの平生に長雷の時にあつても終に一昼夜  
しむなやぶの小便のついでいふまはの事にならぬも  
事なりし身は位守りついであらまははつた事なりし  
武者の戦場へ去らるも切ても若狭とらふまはてぞね歌  
なむともよみなりし時後世は名の中へいふ言の如し  
けし群衆の勝とけしをて位士の要文にありし人の  
何々のに伝へしとさすやあらつたるもいふはとてつや陰持長舟  
ともは尾なる事かともさるるは怪しむ事也  
とらふ方小切の力のよのまあるまはつらかり故は是れ水とほ  
おらしたるついで人目を醒めと傷するたふかくさる人なき  
おらしたるついで傳へらるる疾風の飛眼は一体のはか茶のこ

轉讀上ノ十

射のいづれをいふも青陽の倉さうはれは是よりうけは危き  
まはつらつらひ越王がれなかとめておはせの恥とすく今も世  
上の途なりしてやうも人ふはあらる時をなつやうなき家  
かへ近らからなき世をのあへしついで消なき町をいふ件の  
用とすこの病とてついで海流よはをいふついで時宜しおとす可  
なりとて一病とてなすこといふは難事のいれんしはも便  
しむ侍ありしといふし一知子の居いんは乳母のゆはるとい  
はまはるの科といふもいふも老人のなまらつといふもいふも  
く坂といふもいふも老てふといふ見といふ昔の鬼といふ大  
きといふもいふもいふも老の者の昔といふもいふもいふも  
は若のか脛の九十九夜と一夜のいふてんらんといふことい  
といふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

よぬせのいんらんかゝるまはんも豊との事とおかしく  
さうへーあつれ今更も風さこく一葉のちひいせん  
と藤の情は藤恋さつていしの縁さかゝるまはん  
は藤はしむれ人のガーマいひまのりしと唱まの  
くれし首らうくそゆめいつまゝ

此は余念佛ゆきぬ人のあれと  
わさほふ小使をぬ人そんまき

東浦東ゆきまの万葉の画賛

師の画けとやうとて孝子のれを伝はるは利根の良  
あり家も又と観まやまはれてぬそんまきとそんま  
けお賛といふいふ

鶉續上十一

花まのうりりちを万葉  
かゝるまはん

若菜賣序

七十二候の三つと有て御酒の月令あり暮夜月文樵の二士集の  
ゆきしとて予は序と云ふ是田原の初とて若菜の村と  
権の踊とわて若菜名の松は若菜と怪しむ経はわと誰し  
こて教ふる俗のむしとあり若菜門正記の本昔とていふ  
今麻生は若菜の上のむしとていふは若菜の若菜の  
昔若菜のりしとあり海あり初はむしとていふは若菜の  
若菜の若菜とて若菜のむしとあり若菜のむしとていふは若菜の  
若菜の若菜とて若菜のむしとあり若菜のむしとていふは若菜の







とまればや 茶は清く 月宵の夜  
ひそすよ 葉は紅く じふ六の秋

巻ハ風の葉よあれて 蝙蝠傘て花

恒ハ犬の尻あけて 燈輝輝て愁

昔の文々か残 老の霞を川流

よきを鶴の雲よとく 初くは秋とえんや不

悼楚中子文

お月夜の宵は清息あり 侯とのこのかへまわて返事ハ度  
お作人して高直てもかろもみとひくも尋常の心事と同路り  
ていはいーえよせなる双帯のなりうして来きりたきりぬ  
作是うあとの冬ぬえてうしてさあとも事なぬぬこれのす

聽續上ノ十四

いし剣のちまきめしるぬやうえんた子樹をいしをりしこのは  
のうりもむとまらぬもえしとすも家の侯者のりてわあ  
たしき使しては老今俄は終りて又りて若くしなるを深  
あきれたる世のさあかりたる 齡も今も僅一ツをたててさ  
天中の外かりなめとかもたあたかへんも消せんぬい  
々一初まつく杖はよりなきも再目もか本報もう人オは世の老  
壯と後りそして古きためにもくもける人人のぬますか  
くもももあやまゆわいぬへハよろほふたのりきんへて若き  
人にも遠ざけオキもあ人も人あとうもももも信じていん  
昔のみよりも守朝もいぬもかかかかかかかかかかかか  
かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか  
かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか

あまへたれしつてむらうしと世はうらむしに  
いふ老のしほかへての人のまねひくま業うらむし  
とも少くもらん家も志年の交えりりわたりはく是よ  
ウラのひくしんあまきととちの悔あてやハ有き  
もいハ恨なき齡もいへ別ハしきいれんわ

子浪の侍もしんばとくき収

方笠庵記 五松氏書

方笠庵のぬ一方笠庵といふも方笠庵の記をもいひ  
た一方笠庵といふもいふもいふもいふも世を倒  
の西屋より彼りてまゝ十年の歳とすれりし味もする羽  
茶とまゝゆいへも世帯にわたすれり年同ハ世帯の元なりとあり

鶴城十五

くせ冷焼ハ公里の中水いぬなりて是と一といひの生と林入  
くちの一字ハ笠のたきちぬ形をきりてつるなり  
膝足のぬ神もいひたてぬ根が切の又因もいふもいふも  
古株の侮いせんといふも市人ふ豊くんとあはれせ  
昔人も旅をうらむの供もといふもいふも俗客といふ庵の  
ありいふもて是の笠を事と一守ありいふもいふも  
はくうていふも巻を事とあはれいふもいふも同い  
かりとあはれいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
はくいふもいふもいふもいふもいふもいふも

休翁贊

器に入つて物ゆして己う方円は後つむしハ入つて物よ

なす己う方内を必しせと愛する時ハ眉は余り唐々  
時ハくくく情は隠る虚寒の自在はくく布の一角  
を中々の天地と笑ふ

月夜の袷や形を定むる

〆 瓶 臺 記

井戸車の古いいゝを以て瓶の臺とせしあり是ハ  
あゝ高邸の天井のいゝをくくくて甚よくつれあり  
ゆゑ出て面白き容なりして其斤面は漆にて  
凡ゆる物にハなれりされハ渠をひくとちよ  
至つて危き下りて若ぬの層り大晦日の風呂の  
クハ一ハは縁をてね一其古いいゝを定むる

新編 上十六

それハ轡のふくまはわくく新くつせくくいゝものなり  
りくくくくく櫓垣の姫くくくくくくくくくくくくくくく  
さてや其産にを絶つていゝくくくくくくくくくくくく  
刃の安く静くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
かゝささいさくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
まゝくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
物換り星くつりて玉も六助も今くくくくくくくくくく  
ひとりげ物の刃を全くくくくくくくくくくくくくくく  
必有くて大賞ま客めくくくくくくくくくくくくくくく  
かゝおまゝく行末なくくくくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

川に流れて歸る... 壽のりとも何の面目、  
あゝ只は物の言母... ありの... 人よサ仕の...  
母... ありの... 言母... ありの...  
い... 言母... ありの... 言母... ありの...  
す... 言母... ありの... 言母... ありの...  
か... 言母... ありの... 言母... ありの...  
久... 言母... ありの... 言母... ありの...  
一語の記を... ありの... 言母... ありの...

了却の交 生稿中

續交の言 住柳町

所の名よ... 遍昭... ありの... 言母... ありの...  
... 言母... ありの... 言母... ありの...  
... 言母... ありの... 言母... ありの...  
... 言母... ありの... 言母... ありの...

續後詠詠集跋

む... の... ありの... 言母... ありの...  
... 言母... ありの... 言母... ありの...  
... 言母... ありの... 言母... ありの...  
... 言母... ありの... 言母... ありの...

二度の撰集ありて顔号ハ同一朗詠なかりとの医師と云て是と云りぬよ世の人のよてなきことなきよへり

### 為戒人書序

五十して親と慕ふハ世にありたるもあつた昔大賢ものうい七十して慕ふ人今冬と陽乃箕山公病うけ歎老考の五十田の長子佛子陀若のいよりのまはつたや其生之れはすまててやその能士よの向のうとりむすれはの水の清くぬらうけるぬ人までもよせゆりやあつたよ

編輯中ノ一

とも慮ふ人を勤とていつたりよハありたりといひこの先人烈士子ハ貞享元禄の世にありて其角津堂と曲と友として深く只雅と存つたりと其世の旅白ハ古集にもつんとり其子トまては行以川の才は富もていへけは世は多くむや昔曾子ウ羊希とを合なりといハ父の情トてとてりされハヤ今け箕山子の誦語を敬も又父の情のと慕ハハやそれハ孝よりして捨是ハ孝よりしてすてそ捨てと捨めくま事なく追慕孝情の重なりを并行も只約くねつり清みて柳市のはよ及てはぬらり柳市にはまむ孝子の追福よく真因にてハ





埤下は言ふ家々わらわらとていふは指一本のわら  
 たりなり。利欲は心のわらわらなり畢竟は世に別  
 の二字は家名も蔵も虚生う若くは心も時を種  
 の茶のわらわら身と博の種をうらわらとていふ  
 心は愛まざる業やわらわらとていふは祖師の  
 とむい茶も人の位捨の躰なり其推の木の  
 信と慕にわらわらとていふは一声の真  
 とわらわらとていふは茶をわらわらたり  
 とも真も恒のわらわらとていふは悟りま  
 り轉々なるわらわらとていふは昔の教書も  
 の能沿其流に通ひますとていふはわらわら  
 わらわらとていふは茶をわらわらとていふは初度  
 たるわらわら

新編申ノ五

茶のう中にも長月日の水信とていふは茶を  
 さらう二月の筈も孝行のわらわらとていふは  
 初物と争べは二月の梅秋のサ子ハ捨るゆへ早ふむ  
 ころわらわらとていふは思へは年の内の梅のわらわら  
 らう時々の賞をうれ其餘ハ何ていふ物と回る  
 只のわらわら残るは茶も名茶と慕ひわらわら  
 物とていふは懐くは行はわらわらとていふは  
 時をわらわらとていふは行約の足はわらわら  
 してわらわらとていふは茶人と語るはわらわら  
 してわらわらとていふは茶の本をわらわらとていふ

茶の習習序 其考の集其子洞同り亦は意を

身は伊勢と披くは金玉有錦糸<sup>錦糸</sup>は色くは末人の燕石  
もろくは是くうの鯛と高し守といくうくこ言教うく  
汁ふむくこれ其玉も價とりめてうんんいよあ守  
只これ父と慕ふ孝子のゆよなれくちりやまや  
よりく春よあはり一人もまぢぶの末末まぢぶ  
ふていここととるはぢひまりぬく一介は集ま序  
と流れて生その至孝向いけいといちう一人其  
誠と感つせうひや我う辞やとて草とととひ  
下れくわれんや

カロギン翁先生辞

我と生じものに又母やとあそ舊くくそん先生たり

僕も今年秋いしく病やけ六十をこめり世のなまのり  
かりわれこつとも思ひ人し左田くくわく一向に  
ていよれれもつこくくぬいらあこを先生  
の良劑りとくく再九死の地と出て世へ草よ  
黄くは洛虫の音より行り我はくくくて公地  
このりく菊野ふくか死ををくくゆあわれ  
あくくくくくくけを毎と拾いくくくく例の  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
一癖は止すくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくく

菊のりやまつゆまの東は難まて

二士挽歌

只千々の上とゆゆふもあつたつらさうの故とあつた  
老の常ううと今平いうう春うれはうくもそと口  
友と共うむ睦月も若葉ついで有母子世とらぬ  
十々うはうしてたつたつ初曆

と袖の涼うもぬぬは其サ口余り百折方まうり  
うれはゆゆ世と捨人うは恒菴と好ひううう  
なれハ明きうういーを立寄る世常の裡とる  
ううはたういうハ想思いさううしとま

摘某や友と其世の裡とる

思ううううう遊ううううの初再ゆと口  
ううううううううううううううううう

鶴續中ノ五

古う友と共う

なうううう指とる葉とる寒

尔恒菴語

ううううう法師の書もう奥管てううううう  
以世と遺れ凡雅と好ふうの所在權と似ううう  
よまうせてう書強わやううう世とらぬ  
ううう人というう

示先以辞

横須々の先以ハ桶と結を以て葉とてううう  
凡雅と好るうう世とらぬの傍うううう上の月記

よおふきまの浦伝くも予も時を待たぬよちめ  
凡雅よの家業を妨ぐも家業よ凡雅を  
妨ぐも其りの能階よして階も其夜の能  
階よりけし五論よといひありて  
ゆりい仇も繋とくるとこそ文好まといひ  
高く論とれいさすくるとこそ能階よちりて  
よち月更ては十市の里の哀よも通あらん  
舎と書てよぬ只其室の家よもいひ  
浪の音よち添て長く凡雅の室かあれや

如是會捨詞

かりそのの落として立列わらば  
鶴續中ノ六

おとかり一南空坊も魂よ告む祖翁ハ浪華の  
と借ん出雲の謙念の月よ身を流ふり能階  
行旅の調すもくのとちれハ如是蒼行と  
こむ河を敬くもいひく齡ハ一つの花よを  
我り年月とく一僧字哀れなる世度ハ不之  
ゆり今亦け僕と愴老の月のいつれくの上  
こそ同やうむ

あつちのうらなう書翰のてい信

子右切子書

よもて其思ふをちり時て其よをちれ人  
言を捨るも同よりるも慟くそよ夜うらむ

鳥をうろく月を穿くはうと世はかたや々の眼をうろく  
をうろくれそとやふらさう時君とまふと一度りて  
肝膽をうろく君はかりりり水滸の才は富て詩を以  
て付下はう且能借は好てはま侍の情をうろく敏  
口をうろく玉を吐多をうろく綿を織るまふ詩の  
筆をうろくあふ思ふはうろく風縁は君うろく我を  
うろく遠くは我をうろく君はうろくわろく志の月の容  
をうろくはうろくあふうろくはうろくせむ我を能借の好  
悪をうろくは君とまふの鏡とせむは五十年の非  
をうろくはうろく人やを後の力を得りりりり君を  
能借とるはうろく露川の藍はうろくはうろくはうろく  
其藍の藍はうろくはうろくはうろく其色を慕はうろく

鶉續中ノ七

濃きうろくはうろく深出せむやこのうろくは論をうろく下  
文操十論の上はうろくはうろくはうろく我多年暇暇すうろく  
治候もうろくはうろくはうろくはうろくはうろく我認り君を懐き  
うろくはうろく一度はうろくはうろくはうろくはうろく論をうろく抑  
ふはうろく防はうろく蕉門の逸物や昔葛の赤公原より續  
五節とせむとはうろくはうろくはうろくはうろくはうろく能借の  
書體とるはうろくはうろくはうろくはうろくはうろく其後東西の  
金言妙法はうろくはうろくはうろくはうろくはうろく終正の  
をうろくはうろくはうろくはうろくはうろくはうろくはうろくは  
書て支考の名とかなふもの擬してよりするての  
替と蓮二はうろくはうろくはうろくはうろくはうろくはうろくは  
文標を編て真名の新制はうろくはうろくはうろくはうろくは  
虚實と論一名は能借の二字を返りてはうろくはうろくは

李物耳よふと酒を中して併賣をて後発の  
賛ハ能二子のよ及て以毀譽ハ人のマア  
の君りいふ確論よして殊々ハ今も是は何と  
かくむと先よいふと我君と誇るハ又  
誇き老うと只儻者の誇ると恥と願  
てふと其の可也と君蓮二を誇ると  
すけといま支考を称とんと儒士ハ  
身の上の益と佛徒ハ儒とて其の  
理よけハ願用して今口の法と内  
一漢や支考ハ其の俊良や旧  
短とと一の支操十論の後よ

鶴續中ノ八

能浩とて物女ハ君能浩の益をり  
是と誤るとなれそ我ハ君をす  
情とてを忘れハ其損只名は  
悪とてを其損我はありと  
いふ多言まは思ハ但君よす  
君と我といふをんや而  
川崎や酒は厚一訪れ  
一飲は相笑ひて之杖の回を解ひ

俗の日の序

其書公初生之初の七劫集とて世はあつと中よ又この口集

尾より五分仙といふありたりまゝ暮雨苔の門八駟六  
 けりまのまゝもつゝ一せの二分仙ありこれき  
 程昔叶と軒のわりの公物を拓きて其りよかたはつ  
 して其すの廿竹なり等しゝまよきせやいつれの  
 葉より出たりもてんをすれハ暮雨苔唯其まよき  
 して是と尊して社中さして西此の二分仙  
 つねね尾尾張五款仙を繕ひて稿ありて因りて  
 誰ハ何の尾よりて船を繕りてありてあつて祖初  
 禊りてつりてゝもま眼もて賞りていふ人  
 たりといふは實に本州の面起といふは  
 浄土に臨て予は一倍とすいふは後々嗟乎早く  
 蕉門の盛事や何と口を替んやと年ハ相わの五めり

萬葉中ノ九

龍彦方々をちけもわのよき不冬このりの短き  
 わりて物事とよこてり

郭公文書記

郭公の文書名はかたニつら厚の浪は立並んむまは  
 わりす昔持く文書八世と達れこれ入りて今ハ世  
 かり。空をてゝてたあめ茶いゝて力もわんは下  
 不用の物ハうてことまゝたぬとがしう人ハおわて  
 こと経も二十年は近一通り葉分たるとこのは  
 こと物傳りて序は世葉はけ物まゝにまよきは  
 地とすゝりり物一つ何のおせらゝわんは  
 得ゝまわりの公物といふは造せん

あてしむる思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
あてしむる思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
ついで建つ朝ついで建つ朝ついで建つ朝  
取捨置置を行く思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
ありかむる思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
稀うりこむる思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
むし只画の思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
一師と新割りして草席の蔵あてしむる思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
後日付の思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
ついで建つ朝ついで建つ朝ついで建つ朝

鶴橋中ノ十一

け名をくよふかりつゝ人あはれをちんたるい

一声や二声はうらやうら

白蔵の替

醫者の老死少くとも出家の地獄とてあへ一人の口  
いひの飯粒をなぐいひよりのまの持々象毛とてうらや

異るいふ虎は尾を白蔵と

櫛の白小亭

鹿井氏壽翁の思ふに必情なりとせきのみよわさすを  
異とせきのみよわさすを  
異とせきのみよわさすを



むとふらめむすすあり剗や方は橋の匂と落葉と水  
宝とあまめじと其心うすよ及て戸は小序の需あり  
我々後京極抄改叙のいはいり詠う橋のいふを  
しあてようのよ春の心となりてはむと見とけとちて世の  
後と春をむ人の桂のいふのめと慕ふとてう  
よ其人とあてるとよ其人いちちとこれハ不行の  
名とていふて我短なる他のいふて  
只一詩一句と奉て叙の芳のいふは  
むとていふかると見とよ小序といふて

今橋集序

ハ橋集序

まはまはわあこの年月はあすまのあハハのむと男  
ありありと河は序草とてわて凡雅は船とあまり  
汁飯は海と名よりてハ橋集選んと思ひやり  
このむとてそのなま水行川の泡と傍とて  
まてわて捨とて二の門人まて  
ててて一都の初よりぬはるよりて容  
てて必と端もよけ一海よりて只四季の  
まてとてて見とててせやと且選まの西井  
よとてて其澤とててのゆりよとて  
あつて世はむとて集のよとて  
よのせ言のむのつまわれハ小序を  
まはまはわあこのむとて辞とて

すろては書て読つては謝していふあり馬の車  
のしすはまきやまゆめそそそそ人ぬちりまは  
似てゝの噴れといふもの行るてまはそそそそ  
しめてうわらふなほ八橋もそそそそ物さそそそ  
只これうそいふあそそそ若そそ人の悟まは橋守の  
ちまよそそそそりまそそそむもよや安そそそ

拾扇記

人の心より得るを揚といひ交易して得ると餘  
りへん謝るのれわり買へば價は高下の流わり二つ  
せしそそわわわ拾ふらふ幸なり信吉の濱の小貝  
秋の山路の落葉もひろふ拾ふ物もそそそわわわ

轉續中(三)

へそ折はあれハ幸のさそそ及そそ思ひけそそ  
得るも天のさそそいひて人のそそそあそそ  
驚は血長をものこ天そわわぬぬとそそそ  
舟子まつそ牛の糞もゆそそ亦て得るそそ  
うそ思人ハ論そそ足とそ金銀を拾ふてハ幸  
の甚そそ似そそわそそれハ落そそ人ハさそそ  
舟上破滅は及そそわわわ人ハ其ゆとそそそ  
又このねちり人ハうそそて戻さぬ不持とわわ其ゆ  
怨ふぬいそ活を拾ふぬゆそそそ災を拾ふゆ  
成りへそこのこ知泉舎の主人途は一柄の扇を  
拾つり是人の落そそ物うそそ其ゆハ腰を  
捨てそそいそそそそりそそそ惜そそ姑



二務集序

信濃の約は嶺の名もあふまの侍して四時の雪  
くんとたの名所もゆる吉野も卯月のち  
吹くこれ淀の月りの郭公も声もまると須戸  
更料の月いりて心よとわくの雪もよのつひ  
けつてちやうとほはなる雪もよめてこそ成  
雪の名ちよといくもわされも秋人の目はいは  
漆間の煙もよ立ぬもゆと惜とけ園  
好事の三士集促りてぞ排むいと集成りて  
影早と二務はいはよされは古今集よ三鳥の侍  
ありてそれい女もわちたうへ又も二務の  
侍ありともけ撰者三人の各和の字よんたて

撰續中十四

いま其れはいつたのそよよのいりてや今よめい  
そより異國のそよよを秋相もよ春と秋と  
季そよあよのいじつてわらふよよよりわのよ作も  
不自由なつらふらふ常作の物ぬえよよま庭の  
ねは仙人くもつらつらとてまよまよとてききろ  
むつらふも新は心ぬもよとてぢは不情も雀も  
いよよ一日月もよとてあすもよよは霞も雪のま  
よも朝起も鴨のねも御宿も宿もよまよわ  
やれと縁もけねも母もよまよわとてよとね玉の  
いりててけ集も世もかよとてよよは早此よ  
付よとて採もよ幸もよとてと得りてよよもよ  
こもはわれのよまよとてよ作もよ人よよ



不才のわづらひを以て辞せむと雖も彼の思ひ合す  
夢あり天已は是れ定め物已はありて道はまじらざる  
論を以てことごとく此物も有りて述べて其れめは伏せざる  
よはう其節のうらみ差の次もたれて驥尾よつて  
千里の跋と遺るは李漢の韓文の序を以て世は  
よはういふにめいもいふに厚きは筆を以てて  
翹を以ててまじり

法泉能諧序

閑説む一語は法師とて百餘の人を以てて  
きこえて殊とて今も世に有りては  
老僧の翁は亦得るはことなかりて

くくくくく通日黒田氏釜月子のいふもの一語は  
亦出たり黒田氏嘗て城南に津の里に列せは  
あり此地は名もあふ由士の高松を以てて  
こつこつとあめのかつて富士を以てて  
釜月子の叢文を以てて其れはわい韓使の初  
こつこつと時異客のいふ清いて第一樓のこ  
こつこつとめ初世列せはの早とて此樓の向ふ  
富士のこつこつや其れ余れ用の信投信列の清と  
めつと御まては一らの内は南に指せりて  
勢田の海は深かりて當國のこの地を以て  
なつて七いと斗ふ實は府下の第一樓を以て  
こつこつかす聖徳とては安きとてわづらひ

高士よむらり〜ゆるらる高深のまゝ〜ち果〜  
 口〜や〜〜〜〜〜ひ〜や〜〜〜〜入〜  
 能登の連勢よ好ひて和歌の專〜せぬ〜能  
 語ハ連テ〜は出連勢ハ〜り和歌の流〜  
 皆依仲の凡雅なれハ枝〜とわれ〜根き  
 みる一折の本の竹と白眼〜〜〜とい戸  
 一巻の能登を〜〜法樂の供〜〜  
 連衆已〜まりて〜老〜〜小序の求  
 みの薄芳のあ〜〜〜と辭せん〜  
 ま〜ゆ〜〜世の誇〜年級〜  
 〜〜〜世の誇〜年級〜  
 〜〜〜世の誇〜年級〜  
 〜〜〜世の誇〜年級〜

舞鏡中ノ十七

言聲掬ひ序

今年宝曆甲申の五月是非蒼合聲身まりの  
 旧各追悼の句を撰〜惜〜もむ〜  
 年ハ〜活享〜凡雅〜其志を〜  
 支會必世人と〜ま〜  
 支會必世人と〜ま〜

方々を句わん〜の支吾を定めけり〜の  
交推と論せ〜へ更は往ゆゆ思へ〜を浮き  
白鬢ゆ〜と〜を物撻詞を訳て曰

句中所謂藟子者生最所嗜勸酒必為下物且  
石榴一株書典予今猶存庭畔

其藟女子利 此利子利を利〜利

面影ゆ〜〜 晴の目影利ゆ〜  
音信分までい 夕の片影新ゆ〜

かよふ浮と添ふ乃つ〜下取あめ

ゆめめ裸と喚ぶ本〜赤柳

ゆ向のせ藟子 酒ふ〜ゆ〜あり在

記念の石榴 浮きゆ〜瀟ゆ〜

鶴城申十

他よりや〜

恋じ〜〜あり

輕衣や〜〜〜夢〜毎

巴雀末ゆ〜吟十二巻長秋の具書

我ら祖文を双翁其世も季吟老人の門より〜  
吟老人及び湖春〜雨吟〜吟の二百韻〜めて  
家より〜〜の返き八十年を女の歳〜十〜  
今七十年の後思〜〜其〜の〜む〜  
可辨〜〜〜我又〜  
〜は当時尾城の両京西を〜〜  
一巻の〜〜〜又七十年の後〜





けふきこはるゝ紙燭をてぬと泣きいとよはる業火を  
けし他とてし事あましくおそろくても候もよきぬり  
と親せしハ

火とていりにもぬぬハ人々挽れり

送其常侍

浮藻のたのあつしつらつら仕度のををきくふまて  
侍り方のまゝ望故のありしをぬれをふら送りの席よ  
つたして益とよて藤政とてふ各候別々幸竹は後河  
とよかて是よりきりの便との  
まじりふをいふのそこと行

鶴續下ノ一

蟬引

三伏の日さりの要にたんとて

蟬あつーねきーやとありふまて  
とほつといー日殺し後かくまうらつてや杖れもまの  
つりりやとさするまねはい入して

死のふもつーは 杖の 蟬

賀某判装文

後父の曰御ハお瀬洋をすゝま林の風ーたふと  
さらし管路よあら中心を信んとして世もさういて人將  
まればと安んとして世へついでんを頼りー今や海

世の榮をけりて三つのはらに信をきり入あり  
繪はの水けりて中あり

星夕賦

今宵星の逢ぬありて小娘の昔はわけて若帷  
みまきふりてしるすつれてはははの榮求め毎に種冊  
一竿の糸をちりては帯をけりてききむをばはら  
物とてあやめはふりてははらけりて人らのはらけりて  
のまはら雷の水は星のまはらけりて三階の舟ははら  
は天下のまはらけりてははらけりてははらけりてははら  
ま枝の各のみまらけりてははらけりてははらけりてははら  
やまはら神のまはらけりてははらけりてははらけりてははら

鶴頭 下ノ二

くははらむひてはの氣をあんあははは瓜の赤くてあれ  
くははらむひてははらけりてははらけりてははらけりてははら  
くははらむひてはの樂天ははらけりてははらけりてははら  
けりてははらむひてははらけりてははらけりてははら  
けりてははらむひてははらけりてははらけりてははら  
けりてははらむひてははらけりてははらけりてははら  
けりてははらむひてははらけりてははらけりてははら

赤くは瓜のいりてははらけりてははらけりてははら

くははらむひてははらけりてははらけりてははらけりてははら  
けりてははらむひてははらけりてははらけりてははら

十景記

くははらむひてははらけりてははらけりてははらけりてははら

神ふるんをとり今又半掃庵とて寂れく所のぬれ  
掃目よりいけぬ日多く床の巻をたは余の住とし  
かる庵のほく休をふえり名を二つして物二つを  
オジのいんし七巻を撰い

東嶺孤月 路傍古松 蓬丘烟樹

海天帰厂 龍真寺鐘 市門晚鷄

隣舎春歌

小炭孤月とし巖の三の抹殺山より遠き山とのまわ  
りよりよりてけ山のあまひより十月よりりのく霞なるん  
土峰のいそぎまはる半あり夫うあぬと昔人の歌の  
宝永の比の山の焼くる時夫としまよりよりと昔人の  
りよりよりいそぎまはるのまはるも後

瑪譜下ノ三

文字を抹殺し言をさかへりてはる方紫とてめい  
かへりてはれ目と抹の名ととて方ほくまも蜀  
流と去勢とあり牽牛とくらむつげきならいやは法氏の  
女と画よりまきねるものといひりうまもまもて方らるるはは  
月と夜と長短とありては山の南のわつちて清光とてはる  
西へは府下と月の名をさかへりてはれ目とてめい  
くわる

路傍古松とて世とせかほりて入りめりてはる平生めきてはる  
もあつ又松をたたりてはるもあり凍ぬけ雨のゆらばる  
雪の洞ちうめりてはるも松をたたりてはるも松をたたりてはるも  
てりへはせ七をいひて幸情のいそぎまはるありてはるも松をた  
たりてはるも松をたたりてはるも松をたたりてはるも松をた

蓬丘遠樹は刈熟田の正社ありさるの社は八幡とてまの  
宿禰の嵐は幸の南の觀なはい藤まごほまごほとて杖  
曳くあやの華表も木の間に花めりあはは熱田まごほ  
ね風の里夜堂の里心は法を濟むとて國の舟は八幡  
あはまごほつらなりして是熱田の浦をさぐりし海  
やまごほまごほなれも家上居けりあははねとて  
のこほいこほまごほ

海天新雁はあはりしあはりしあり

屯真寺傍の房のなきは深障なる木三つ村の彈枝ありあ  
まありておほくまごほまごほは障のつくは南ありつら  
とてて向て曰くまごほの珠もまごほまごほ何ぞまごほ家上  
言て曰容もは女中の貴まごほまごほまごほあり

萬續 下ノ四

の程果はかりてあは着束竹のまごほあはまごほまごほ  
少半破窓のたごほまごほまごほまごほは障の腕に列を若  
てまごほの傷をたごほまごほまごほまごほまごほまごほ  
取たごほまごほ蛾眉蟬聲も今つらまごほまごほまごほまごほ  
まごほまごほまごほの舟まごほまごほまごほまごほまごほ  
と密もまごほまごほまごほまごほまごほまごほ

市門の曉は西の方あはまごほまごほまごほまごほまごほ  
まごほの舟まごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほ  
まごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほ  
まごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほ  
まごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほ  
まごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほ  
まごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほまごほ

より市門つてあれら曉のさし花うらうらと光のむすのち  
らゝゝかた

隣舎の番舟とてわらわりの農家の回らんいふも及す  
りのしかのむかしなかり一たしむの曉のハヤハ  
たふちあむとてやあらしんらんたふす軒の業  
むいゝくまの梅福のなむらんハヤのハヤハ  
光をかりんて糸とてあせわたりんらんハヤハ  
蓬萊のむしとてあしとてあしハヤハハヤハ  
一とてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
はたのくまむとてあしとてあしハヤハハヤハ  
あや

不羨庵記

既してはむしとてあしとてあしハヤハハヤハ  
さあし住勢や尾張の彼とてあしとてあしハヤハ  
人むしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
なむしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
まむしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
らむしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
かむしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
むしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
むしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ  
むしとてあしとてあしハヤハハヤハハヤハ



このりも居居をいれ住人のんすあたら居あるも  
月夜をへりて風雅をいふとてほくくは住向とゆ  
一昔既籍うあまうてすくあすあへん二この眼をつい  
たつてせもまきえうまて人又いれ白眠せりんやま田作  
よは各よも寸今仕業の宿路のたしむく女は居あはんむ  
と共く衆と交りて礼と忘れ分りて志と居へんりのあまの  
あつきててねいゆもくく一居かんて風雅をたのむ風雅  
みんそるをさかかんあきて念味も覚てま雲の志んまか  
まてく固居り休て白露のいひ城のりこまもま白倉のうか  
らいくま白倉の各空りしと

七不思議後序一

轉續下り七

和歌の西行あり連奇と宗祇あり能治と芭蕉翁ありて三才だ  
そはくはれし皆中水と俊東と寸文人登士と師といひむ  
ものつはれ能治と寸人の杖と鞋のいひやいひ同者の志を  
あまするもり今や狂歌家等といひて是も寸能治師のあ  
用眼とわ伴のぬく庵とてはるのくも家業はまの  
しはは信と師をわさるれば本まといけぬ文章一あまといひ  
けぬりのくさり布衣家庵のく人まは宗祇の名とてられもあ  
風雅はあれか身健は幸はして何と嘆伏とて寸人きやとすくあ  
西の詰よとくまといひてはるのくまといひてはるも  
け人といはは庵とてはるあ海とてはるもくまといひてはるも  
是れ能治の行とてくくく西行と書とてはるのあ  
つれはれんも宗祇の狂といひて盗賊のおとけはる



以先く同志の徳ありて鶏黍の約をかめりれも茶儀と  
倒つてき餘の木と敷きよなまてまめりてかゝりて  
まらうりて幸紀行とてせんぬ下りて人紀りの標を  
またま二三條の白を降 なるかゝりてまきよとの枝あり  
とととれ保なきことこの條もはやゆひよ分たり小  
主人の遠遊し枕をゆめのやも狂舞の標森のこゝかきし  
ひんと白一書て終る

拾う梅八扇とこゝのい梅より

贈暁吾辞

暁吾めえ我まぐ公の悲歡丁と五十年塵生う夢の劫定  
けりりて歎して老と老致仕とふかお勤勞いさうすま  
も職承とてうりてかゝりてや衣食位の水いりぬお  
うき流石とてかゝりぬ一先の折れしなまらうとてい  
つら

馬賣下ノ一

梅のむけや世と外の花を跡の事

巻記 五腕吾霞

縁管なる黄鳥の丘陽よむるも止るも梅なり世の雲水と  
小僧侶の一匹不仕をすすむ依の留もんといましめ  
も年老豆弱とて止る梅なりてやい有入き恒の梅も  
恒の心むかすむいへかりは翁のの巻むすもやよ  
う師ありて胡女の祭を臨れも惟一の三方二千ハ  
女置もらお佛一といり行一第一茶瓶大燈とて  
く沢札の屋まてくお具と納る澳ありき箱とわらる紫あり

藤を容たいと女一れ女の防下下の役いゝゝの姿を  
費えきまは姑く支替のぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
廿八ハシは狭いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
わ。

蚊屋つりてくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

### 蝸牛新頌

猶もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
の連胤を車二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

葉としゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

季書

### 黄岡亭記

世の求むる衣食住の三ありて一日もなくては計り難きをい  
はるゝめづりて挿ふもむらゝは棲むるん事の江の橋  
のたゝいあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
月もたのまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
宮のつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
しては女ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
山の街道もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
のつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
目とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のちの夜中の枕よひごとくは丹人の都せも此詩客の  
に八重のつらきつてあまのむかひ人ありては事よ名と  
且記よしむ詳とる幸成くうは活わく又及くちり  
にれ我れなき事ありは居のためりわて竹の林りり大  
なる物稼のこしと是ては家なきをもちりてあはし  
のまの友かたしもの比ふ是れをさへ言へ幸やと友同  
再しなむれを國てめしむ才なきをさへ言へ幸や  
は吉のうふふくはむし事のにとも一りり吉のあこ  
らき入らうは船も事してやうむじやいれもはてし  
と煩く事なれ

各茶抄肆

兼松よ名をばてほきせし人ありとてふくはるる  
うさうふかればかりとくはなをその代書て後  
すくうく飛空

茶うんじ竹やありの住き

飛鳥山賦

うふこの幸の幸ははなるありあは飛鳥山のた人  
くくはなる日敷もや弥世のせむありぬ  
強くくちつて保くくは威のをもと  
情は遊人か家のこもあす友は所のこも  
てい夕そらにゆははるるもすくくちあきめ



これハ其の人の作と云ふ或ハ山姥のむくひつゆめをむむ  
めて居る滲せしも高土の上に於ていらぬと云ふ  
とめはいてや印を解き復とつけしや廿二の世を  
いんたの  
いも漢一孟母のおと結をぢも此れなり水田氏  
の居宅ハ母橋と云ふ金輔也。朝ハ輝三朝日夕  
の海にかりとて人見とちからを繡のそと掲ぐ  
をすると海はむくなり宿條はまきやの志わ眼  
昔にうらな御座玉を作々世縁のまき志  
とて後了と云ふ。長く付纏りてこの山姥の  
とて後了と云ふ。長く付纏りてこの山姥の  
とて後了と云ふ。長く付纏りてこの山姥の  
とて後了と云ふ。長く付纏りてこの山姥の

鶴巻 下ノ十二

其書はゆかた人馬傳なりと云ふことありて  
そのものなりといふは女をわたり

訪以文辞

以文字君にさしいれりて来りて  
うけ橋條の詠をうけて帰國の折に  
家おとすといふ新芒の馬をい  
こりやの白いは行旅條のやせ  
あすは叶いてわりの風流い  
ゆめへのあはれをいふ

生海はまゝの境のきかた

嘯菴詩

絃外辭劍さけむうの淺袖よきりてこゝろを  
一ッの好ましく歎れぬもあゝ梅軒の嘯菴子いづく月  
こゝろ一朝いけ中枝の月をも待て故つゝの露も借  
ぬこゝろこゝろと目もさぬ風のまのゆくゆくは  
よれつゆまてひびくよまの潮さうさうと悲しく  
ていんんこな誰をささぐんけた子公武門乃  
藝能他は勝れ百事百成の志利のこり流く蕉内のは  
暮ひるこり一にふゆの朽地を消え又ハ夏中  
百戦の口ぬゆをつゝぬ相昔風雲あや雲に魂を  
かかすこりいひ道の大惜せむこり昔の誇りこり  
こり一我こりいふすせかりこり金のさくこり

萬續下十三

月の夜ほろ雪の朝會某人かれ一我さうこりこり我  
うけて菴子たのまをこりをこり一の口こりこりサヒ子を  
天灸時まのこりきをぬと持ハ人車の上こりこり  
こりこりこりわれあこりこり取こりこり拵有れハ  
是ハ我なこりこりこのうさひいりされ一我ゆきこり  
いんんこりこりこり興こりこり一夜の愛こり  
かりこりこり思たつれれこりこりこの別墅いんんこり  
ぬこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり  
こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり  
なりこりこりこりこり春君の清然によりこり我ハねこり  
官はこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり  
ありこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり

名残くよよ止むと梅軒は世日の国をぬく  
 この山にたぬわり雪の郭公と我よんまよ四月のちと  
 昔笠の旅といひつゝ心も中ままん一ちかりたてて  
 今平井と取あんとぬ辞はしひの毎しゆを移る中よも  
 世のわらうもあはしむわれはこころわく新ろくちまり  
 つよもそれハ我方の上さよと思ひつれ蒼子ハまらけ  
 すとちうられこころ移と我固むこころはまうさわり  
 こころ定めなむよハ始めて思ひ合はれぬこころはけり  
 かかち中さよまてよ言えわらも我にこころわりと人もゆひ  
 かさこころ一若雷探ゆきこころハ梁月の夜ももると  
 けり向の鼓推を定めよ傳伴それあ士の雪ハ時方て  
 消ゆこころ恨綿こころてまも期わこころ  
 携誠下十四

供花 そらむけて寝まぬせむはす  
 拜礼 社 奇カキ子位袖もたふ夜まひ

多の風詠

中々の秋ハい武蔵のよありて備巻子う計も寝さつら  
 今午もかう一昔妻よ下りて祈こころいふ秋毎月  
 草風子うけらるる便さきこころいふこころや其奴披  
 こころハ合りたてぬもやほろこころ空よのこころ  
 涙めこころはなれこころは夢をふりこころいふこころ  
 そらむこころ袖ハわれとめぬこころ秋ハはまいつら  
 かりこころいま寝支れも定まらるわこころいふこころ  
 こころいふこころ其よりこころのこころなすこころ





世をわへハ蕉門も一旅の大ぬへハくくに承つへき  
器とくく夏むの舌歸らんよせし旅多ふ侍後せぬ人の  
袖も雅々旧の川流もあけくくくくハ全方くく  
くくくくくくくくくくくくくくくく

こぬわくれあまろみ月も片くく

悼八竜辞

時そ庵のめし月よりぬ洲むくく一月を思へハを  
くくく母やくく我毫乃巽よわくく其わくく  
遠くくねハタアの雲方くと立のわくくは空を泳ゆり

故やりのまはてくく世の標く

鶯續下十六

悼五條坊文

六、蒼は別れ反る舎世とくく其折くの傍くく  
行い五条坊の健た思ひくく其世のくく  
くくくくい出てをを厨むくくくくくく  
暮露のくく秋くく待も水毎月のを  
惜むくく一歩竹卒は齡と清くく松中よりくく  
いんくく我くくく誰れくくくくく  
かき友は位くくやの羽めけ

傍信別松奉射山

始山くくくく宗匠某くくくく名くく  
くくくくの差合て出でて改名の字を予にりくく

け名と思おもてゝ姑射山の字を搞てういひ  
かうしちうの一字と違て射山といふ下ろ  
一文字とあつて姑射といふつれもの意を  
失て二つと定めむわの誤であらうと考の  
序よりいふ

かやういふ名をへて呼子鳥

又某文

好て豪飲を耽る人ありいた思ひも下ろ有らん忽  
八仙の仲間を遊れて今有りいゝ酔うと固く物  
々々行末の乱れ我々いゝるめりや右に字す  
い言語を書て得せり後おはれり下ろあり

漢讀 下十七

酔て面白やん止てよやん其を聞かざれ  
其責のいと切なれいゝいゝてするや一と  
いふ

神もけ酒をさす神祇

一を酒画賛

け酒を誰とさすなんといて名をつけて  
容貌いゝ陶氏の髣髴ありいゝ例の  
菊のいゝ音評をさされり東籬すま  
白くして五株の柳も昔もいゝはるは  
冬開明いゝいゝ

菊のいゝいゝところや酒の朝

正茶名文

茶体わつゝは製して名をいふ、定めむと持まらざるべし、  
とりあへずと雜の一句を茶名に犯すべし

茶の下のわらふく片のハ松うふ

これといまふべしといふべし

醉産亭記

こゝは呉竹の昔跡、酒樽ありて、臨印より月  
むしのわいふ店に似て、わらふく又六、松葉  
常盤の文、俗く雅のこゝろ、松葉をいふ、つゝ松  
土蔵の白壁雪と奮ふ、其わらふく又風雅、こゝろに  
強人、こゝろに、こゝろに、松葉をいふ、つゝ松

萬續 下十八

つゝこゝろの行の多葉、かくも毎日、松葉をいふ、つゝ松  
松金買のこゝろ、二葉の情を、強くせすたのわらふく、  
得るわらふく、わらふく、松葉、わらふく、松葉、屋の水を  
付われ、松葉、一室を、松葉、わらふく、松葉、わらふく、  
卒、松葉、松葉の二字と、松葉、わらふく、松葉、わらふく、  
龍鏡の求む、松葉、金毫を、松葉、わらふく、松葉、わらふく、  
わらふく、松葉、わらふく、松葉、わらふく、松葉、わらふく、  
持合せの十年の、松葉、酒を、松葉、わらふく、松葉、わらふく、  
且、松葉、わらふく、松葉、わらふく、松葉、わらふく、松葉、わらふく、

松葉居記

居所の号を定めて、松葉居人なり、其人なり、松葉居人なり、松葉居人なり、

よふ枕をひきあきて夜の時よりうらむるを夢とてし  
きて夜行とていふ言まう一人はちこれゆをいひ  
辞とていれども其業を伴は長き世證を公のあへん  
ことと白くま向さうけて是らうのちまひすこれ  
乃は徳あり家あるまといにうろくせん世に  
ゆのついでこれかゝることを常として細きこと  
とのこといふこといふ物と稱は只其夜の常とて  
いふれ物必をいぬ長久の智なきとやこれハ夜  
の泥りるを夢と稱して千秋の二字は定めゆ  
すは其唱古くいふことと母字と上下に並  
うらむるをかゝるくといふ所病あり終り  
秋千君の二字を影といふの求よりてなり

愛知県



1103259491